卒後２年目看護師の不安に対する支援体制の検討
―ＳＴＡＩとアンケート調査を用いて―

キーワード　卒後２年目看護師　不安　支援ニーズ　継続支援

Ａ棟７階北　○辰巳麻紀　山中委豆美

Ⅰ.はじめに

看護師は、患者と家族にとって最適な医療・看護を提供できるように、能力の開発・向上に努める必要があり、継続教育が重要とされている。卒後２年目看護師（以下２年目看護師とする）は支援体制が充実している新人看護師と、チームの中で活躍を認識できる３年目看護師との間で「教育的働きかけの盲点となりやすい時期」といわれている。先行研究において２年目看護師は、「早く１人前として自立したい」「未熟であり１年目と同じで変わらない」など、理想と現実の差を感じる時期と報告されている[1,2]。また、先輩看護師の目が離れ、独り立ちに伴う不安によるストレスを多く抱えている[1]ことが明らかとなっている。しかし、２年目看護師の不安に対する効果的な支援方法は確立されていない。

Ａ病棟では、２年目看護師への支援体制に決まったものはなく、先輩看護師個々の教育に任されている現状にある。そこで２年目看護師に継続した独自の支援を行い、抱えている職務上の不安と支援によって不安に変化が生じるのかを明らかにし、検証することで今後の２年目看護師への支援体制の基礎資料にしたいと考えた。

Ⅱ.目的

Ａ病棟における２年目看護師の職務上の不安と支援ニーズを、独自の支援を通してＳＴＡＩ（状態-特性不安検査）とアンケート調査で明らかにし、今後の２年目看護師に対する支援体制確立に向けた基礎資料とする。

Ⅲ.用語の定義

１．振り返り：２年目看護師が自己の不安や目標に対する思いを語る場のこと。

２．支援検討会：振り返りで２年目看護師が共有可能とした内容をもとに、研究者で必要な支援方法を検討する機会のこと。

Ⅳ.研究方法

１．対象および期間

対象　：Ａ病棟２年目看護師３名

期間　：平成30年10月４日～12月12日

２．支援方法

１）毎月１回、研究者と振り返りを行う。内容は先行研究から面接に適していると導き出した①仕事に対する不安②目標③同期や先輩との関係性の３項目とする。また、振り返り実施時の２年目看護師への対応として下記のように統一した。

・発言を遮らない、否定しない

・自己解決困難な事例に対して助言する

・容易に応援するような発言はしない

・個人を特定するような言動（特定するような個人名詞）はしない

２）支援検討会を行い、導き出した支援内容を先輩看護師に各チーム会終了後に伝達する。

３．調査・分析方法

１）ＳＴＡＩ：支援前後で実施。

評価は160満点の数値で単純集計を行い、前後比較する。

表１　アンケート内容

		設　　問
時期と回数	1	振り返り１回にかける時間について選択してください
	2	設問１で選択した理由を選択してください
	3	あなたは２年目の４月～11 月のどの時期に関わってほしかったですか
振り返り内容	4	行った２回の振り返りについてどう思いますか
	5	行った２回の振り返りでよかったと思う理由を選択してください
	6	行った２回の振り返りでよくなかったと思う理由を選択してください
	7	仕事に対する不安について、他にも聞いてほしかった内容を選択してください
先輩や自身の変化について	8	支援前後で先輩のあなたへの関わりに変化はありましたか
	9	先輩のあなたへの関わりがどのように変化したと感じましたか
	10	先輩のあなたへの関わりでどのようなことが変化しなかったと感じましたか
	11	支援前後であなたにどのような変化がありましたか

2）アンケート：支援後に実施し、内容は先行研究を基に時期や回数、振り返り内容、先輩や自身の変化についての 11 項目を独自に作成した（表１）。回答方法には設問２、４、８、に対してリッカート尺度を用いた。設問２では［長かった、やや長かった、ちょうどよかった、やや短かった、短かった］、設問４では［よかった、ややよかった、あまりよくなかった、よくなかった］、設問８では［変化した、やや変化した、あまり変化しなかった、変化しなかった］を択一回答とした。設問５、６、７、９、10、11、は複数選択可能とし、単純集計を行った。また、自由記載欄を設け、内容分類した。

V. 倫理的配慮

1．研究参加への配慮

対象者に研究目的や期間・方法、研究参加・協力への自由意思と拒否権、不利益が生じないことについて、文書を用いて説明し同意を得た。また、ＳＴＡＩ・アンケートのデータは個人が特定されない匿名化とし、厳重な情報管理を行った。

2．振り返り・支援体制への配慮

日程は、毎月１回２年目看護師の同意を得られた翌日が休日の日勤とした。時間帯は日勤終了後の約 15～30 分程度とし、研究参加に伴う対象者の負担軽減に配慮した。振り返りで共有可能とした内容から支援検討会を行い、導き出した支援方法の共有は、チーム会と病棟詰所会の終了後にその他の看護師が退室した後とした。

VI. 結果

ＳＴＡＩ・アンケートともに回収率・有効回答は 100％であった。ＳＴＡＩの平均点は、支援後が 94±16 点と支援後の方がわずかに低下していた（表２）。

表２　ＳＴＡＩの結果

	支援前	支援後
平均点	95.3±6.7	94±16

設問１の振り返りにかける時間については、「15-30 分」が２名、「45-60 分」が１名であり、設問２のその理由は３名が「ちょうどよかった」と回答した。関わってほしい時期についての設問３では、「４月」１名、「６月」２名と回答し、早めの時期での関わりを希望していた。設問４

で２回の振り返りについては、３名とも「よかった」と回答し、設問５のその理由は、「振り返り実施者と時間を作って話すことができた」「自身を振り返る機会になった」であった。また、「自分の目標が明確になった」「今後の課題が明確になった」が２名、その他に「不安が軽減した」「不安なことを話せていなかったので良い機会になった」「自身の長所・短所・くせが分かった」「不安な処置が減った」「学習意欲が向上した」との回答も得られた。設問６の振り返りでよくなかったと思う理由では、２名が「緊張した」と回答しており、その他は「振り返り自体が精神的負担だった」「成長を感じられなかった」との回答が得られた。設問７の仕事に対する不安で他にも聞いてほしかった内容では、「不安な知識・技術」「分からないことや判断しかねること」「先輩看護師になったこと」「小チーム活動」「モチベーション」「多重課題」と多様な回答が得られた。また、先輩看護師の関わりがどのように変化したと感じたかを問う設問９では、「声をかけてもらえることが増えた」「困った時に気付いてもらえることが増えた」「メンバーとして認められていると感じることが増えた」「不足している技術についてアドバイスをもらえる機会が増えた」「指導を受ける際に考えを導いてもらえる機会が増えた」と回答が得られた。設問 11 の自身の変化については、３名とも「目標を持つことができるようになった」と回答し、２名が「モチベーションが上がった」「学習意欲があがった」「自分が行った看護を振り返るようになった」と回答していた。その他には、「専門的看護知識の習得への関心があがった」「看護技術への関心があがった」「処置に対する不安が減った」「自分のことだけでなく、他のスタッフのことも気にかけるようになった」「チームの一員という自覚が強くなった」との回答も得られた。

自由記載では、選択回答と同様の内容であり、分類には至らなった。

Ⅶ. 考察

今回の研究で２年目看護師の抱える職務上の不安とは、先輩看護師になったという責任感と同時に判断力の未熟さ、看護の知識と技術の習得への焦りであり、先輩看護師からの継続した支援を求めていることが明らかになった。ＳＴＡＩでは、支援後の方がわずかながら平均点は低下しており、継続した支援は２年目看護師の不安の軽減につながることが示唆される。森下ら[3]は、「２年目看護師は、患者や先輩看護師から承認が得られる事で前向きになり、成長を実感できる。」と述べている。先輩看護師が行った具体的な支援は不明であるが、先輩看護師から「メンバーとして認めてもらい、困った時に気づいてもらえた」「技術についてアドバイスをもらえる機会が増えた」など関わりが変化したと感じることで、２年目看護師が安心感を得られ、前向きな気持ちにつながる支援ニーズを満たしていたと考えられる。さらに、安心感や自信をもち看護を行えるように、先輩看護師は２年目看護師の行う看護に関心を持ち、２年目看護師と日々の看護に対する肯定的な関わりをもつ必要がある。

振り返りでは、目標について言語化することで自己の課題や目標を考える機会となった。２年目看護師にとって、日々の看護を客観的に評価することで自身の変化を感じることができたと考えられる。谷脇らは、２～３年目看護師にとって自己の行為を振り返ることは、自己教育力を高める内発的動機づけに発展する[4]と述べている。そのため、主体性を育めるように振り返りの機会を設け、関わっていく必要がある。

内野ら[5]は、「２年目看護師は新人看護師と変わりない先輩看護師からの支援を、仕事をする上での支えとしている。また新人看護師ほど綿密な教育計画は必要としてないが、新人看護師を迎え病棟が忙しくなる前半こそ先輩看護師からの支援を必要としている。」と述

べている。A病棟の２年目看護師にも先行研究と同様に職務上の不安があることが明らかとなり、早期より継続的に支援を行っていく必要性が示唆された。しかし、今回の調査対象が３名と少なく、導き出された結果は一般化できない。また、研究者で振り返りを行い、「緊張した」「負担であった」などの意見もみられたことから、今後は、振り返りに適した担当者や時期・間隔なども検討し、より充実した２年目看護師への支援体制の確立を目指して取り組む必要がある。

Ⅷ. 結論

・２年目看護師の抱える職務上の不安は、判断能力の未熟さ、看護の知識と技術の習得への焦りであった。

・先輩看護師からの肯定的な評価と、成長を実感できる継続した支援を求めていることが示唆された。

引用・参考文献

１）瀧口裕子：卒後２年目看護師の思いや支援ニーズの実態調査-係長としての教育的サポート-，徳島赤十字病院医学雑誌，18 巻（１号），p. 88-92，2013. 03

２）杉田久子：臨床看護実践における２年目看護師の知の語り - グループインタビューの分析から - ，日本看護学科学術集会講演集，34 回，648 項，2014. 11

３）森下歩：卒後２年目看護師が看護師として前向きになれた事　１年目から２年目に移り変わる時期の看護体験から，日本看護学会論文集:看護教育，48 号，p. 110-113，2018. 02

４）谷脇文子：卒後２～３年目看護師の臨床能力の発展に関する研究　卒後２年目と３年目看護師の臨床能力の向上・促進と経験の特性，高知女子大学紀要，看護学部編，55，p. 39-55，2006.

５）内野恵子：２年目看護師の体験から考える成長発達過程，順天堂保険看護研究，５巻，p. 59-66，2017. 03

６）友安英喜：新人看護師の視点から考える新人教育のあり方　効果的な教育体制，日本精神学術集会誌，58 巻（２号），p. 156-160，2015. 08

７）丸山訓子：卒後２年目看護師への先輩看護師からの指導を考える-困った場面で受けた支援からの分析 - ，日本看護学会論文集：看護教育，45 号，p. 218-221，2015. 03

８）福井早苗：卒後２年目看護師と教育担当者の継続教育についての認識，高知女子大学看護学会誌，38 巻（２号），p. 129-138，2013. 06